

がく
楽
サイエンス

3 2005

地球に触る？の巻



蒲郡情報ネットワークセンター
生命の海科学館

66 1717

「まわる地球」との出会い

明けましておめでとございませす。

さて、皆さまは2005年の年明けを、どのように迎えられたでしょうか。私がまだ小学生だったころ、保護者公認で堂々と夜更かしのできる大晦日は、特別な一日でした。紅白歌合戦を見ながら年越しそばを食べ、お腹がすっかりあつたまつたところで、除夜の鐘を聞きながら家族で初詣に出かけます。顔がシモヤケになるかと思うくらい寒かったけれど、冬の美

しい星空の下の風景が日常とはまったく違うように感じられて、たまらなくワクワクしました。

初日の出をはじめ見たのも、この頃でした。まだ、太陽が地平線の下にあるうちから白々と空を染め上げ、街の景色を刻々と変化させる太陽の力に、ただ圧倒されました。

こうした初日の出の体験は、太陽は地平線から上ってくるおそろかなもの、というイメージを私に与えてくれましたが、地球が太陽の周りを回っているという考え方は、まだ私にはありませんでし

た。地球は、太陽を中心とした太陽系の惑星のひとつであり、太陽の周りを定期的に巡っている、ということを知るようになったのは、私が小学校高学年になってからでした。

私が、この地動説といわれる考え方を理解するようになったのは、月や星、流星群などの自然観察から理解したというより、小学校の授業などで訪れたプラネタリウムの影響が大きかったように思います。

宇宙と地球とプラネタリウム

プラネタリウムに入館し、暗い空間の座席に身を沈めていると、解説員の声が聞こえてきます。「ほつら、今日の太陽が西の空に沈んでいきます…」



プラネタリウムはいやし系学習の場？

どんな夜空の再現も自由自在のプラネタリウムは、ちよつとしたタイムマシン。

ドーム状の天井に現在の空の様子を映し出し、少しずつ時間を早回しすると、あれよあれよと言う間に太陽が西の空に沈んで行きます。そして、だんだんと夕闇が濃くなり、やがて、現れる満天の星空。さらに、解説員の声が語ります。

「さて、今日の夜8時の星空があらわれました…」

こうしておよそ1時間、規則正しく巡る星空や惑星の運動を体験して、それらを説明づける地動説の宇宙観について学びます。

さんさんと陽の輝く屋外に出たときには、なんだか時空を超えて帰ってきたような、不思議な気持ちになったものです。その夕方、近所の公園で沈む太陽を指差しつつ「西！」と唱えながら、得たばかりの知識を確認したことを覚えていきます。それは、動いていないように見える足元の「地面」は、実は自転しながら太陽の周りをまわる「地球」である、という知識と日常とを結びつける、自分なりの儀式のようなものだったのかもしれません。

実は、日本は世界有数のプラネタリウム大国です。日本プラネタリウム協会の2001年の報告に